

『世界侵略のススメ』のススメ

タイトルだけみると何を言い出すんだ？と驚かれたことでしょう。マイケル・ムーア監督の『世界侵略のススメ』という映画が予想以上に興味深かったので、ぜひおススメしたいと思います。

あらすじは、アメリカ国防総省幹部が、第二次世界大戦以降、度重なる侵略戦争により、予算を無駄遣いし、石油も得られないどころか、戦争が戦争を生み、過激派を生み出すなど、思うような結果を出せない事に悩み、映画監督のマイケル・ムーアに相談します。そこでマイケル・ムーアは、しばらく軍事侵攻を中止させ、自分を「侵略者(?)」として、世界各国から「あるモノ」を略奪するためヨーロッパに出撃させるようにとアドバイス、たった一人で世界侵略に向かうというのですが(この辺りまではフィクション)、本編はドキュメンタリーであり、その「あるモノ」というのは、世界の様々な慣習や価値観、アイデアなどで、そのどれもが興味深く、考えさせられる内容のものでした。

そのなかの一つ、「学力世界一」のフィンランドについて。

フィンランドと言えば、エアギター選手権を作り、携帯投げ競技を作り、妻運びレースを開催する。そんな国の人々が、本当に教育を極めた天才たちなのか？

もともと、フィンランドの学力は、アメリカと同レベルだった。しかし、フィンランドが新手法を試したところ、たちまち世界のトップに駆け上がり、世界一となった。いったいどうやったのか？その答えを探るべく、マイケル・ムーア監督がフィンランドの文部大臣を訪ねると、文部大臣はあっさりと「宿題を廃止した」と暴露。宿題はあっても数分で終わる程度。子どもは家に帰って、たっぷり遊ぶ。文部大臣曰く、「子どもらしく、日々を楽しまない」と

他の教師達も、インタビューのなかで「友達と遊んだり、家族と過ごしたり、スポーツや音楽や、読書を楽しんだりすることが大事」「子どもが木登りしたいと言ったら？」「木のぼりの仕方を覚えるといい。でも途中でいろんな虫を見つけて次の日話してくれるはず」などと答えています。フィンランドの低学年の授業時間は週に20時間なのだそう。(1日3~4時間)

校長先生曰く「脳を休ませないと、ずっと酷使していると学べなくなる。それじゃ意味がない。」

フィンランドは、西欧諸国のなかでも最も授業時間数が少ない。しかし、学力は伸びた。インタビューに答えていた学生たちも、母国語以外に英語、フランス語、スペイン語など、数か国語を話せるとのこと。

アメリカでは教育がビジネスになっているのに対し、フィンランドでは子ども優先。遊具を設置する際も、建築家に子どもと話しをさせ、子どもたちの意見を取り入れて設置する。また、学校は、ほとんどが公立。どこの学校へ行っても同じレベルの教育が受けられるため、学校を選ぶ基準は、家から近いかどうか。「裕福な子どもでない子どもも公立に行き、様々な境遇の子と一緒に育つ。すると、裕福な大人になっても他人の境遇を尊重できる人になる。」という。また、フィンランドでは、子どもの将来を見据え、早い時期から希望に沿った内容を教えている。だから、子どもたちも将来“好きなものになれる”という言葉にウソを感じない。すでに夢の実現に向けて歩み出しているという実感があるから。

フィンランドの教師たちの言葉も印象深かったです。

- 「生徒が自分の脳を活用できるよう、必要なことは全部教える。体育も美術も音楽も含めて、脳を活性化するのはすべて。調理したり、歌ったり、美術や自然探索もみんな必要。子どもでいられる期間は短いから。」
- 「問題意識を持って自分で考えるように教えている。自分も他人も尊重できて、幸せに生きる方法を教える。」
- 数学の教師ですら、一番の願いは、「生徒が卒業後に幸せに生きること。」
- 「テストで点を取る訓練は教育ではない。」
- 「学校は幸せになる方法を見つける場所。」
- 「子どもたちはいつ遊んで、友だちと交流し、人として成長できるの？学校以外の場所にも、人生は山ほどある。子どもは遊ばせたい。」

この映画では、他にも、これまでの私たちの常識が覆されるような例が沢山紹介されています。ただ、これらは、アメリカが抱えている問題に対して、マイケル・ムーア監督が見つけた答え(理想)を映像化しているものなので、実際はそれぞれの国において別の問題を抱えているのかもしれない。また、それが絶対的な正解とはいえないのかもしれない。しかし、私は、この映画を見て、価値観が変わったというか、日本が、これまでいかにアメリカから多大な影響を受けてきたのか、と考えさせられましたし、日本もアメリカと同じだと感じる部分がいくつもあり、やはり、広く世界に目を向け、多様な価値観、考え方を知ることが大事だという事を改めて感じました。機会があれば、ぜひご覧になってみて下さい。